

『ヴェイパーフィクション／ハイパーステイ
ション 第一話』

○アパートの一室（夜）

六畳一間、築年数50年ほどの木造アパートの一室。床には読みかけの漫画雑誌やカップラーメンの空容器、飲みかけのペットボトルなどが転がり、台所には洗っていない食器類が溜まっている。

そこで、ヨレヨレのジャージを着た40代ほどの小汚い男・田中が、テーブルの上に置かれた何本ものスプーンを使ってスプーン曲げを試みているのを、テレビ番組のカメラが撮っている。

田中「おっかしいな：いつもは曲がるんだけど：本当ですよ、いつもは簡単に、クイツと折れちゃうんだよ」

田中、カメラ視線になる。

田中「疑ってない？ 疑われるとエネルギー吸い取られちゃうんだよね」

○テロップ…あるテレビディレクターの証言

○喫茶店（昼）

男性ディレクターが何者かの取材に応じている。ディレクターの姿は口元しか映らない。取材者の姿は映らず、台詞のみ。
ディレクターはスパゲティを食べながら話す。

ディレクター「嘘ばかりなんですよ、あの人は。まあいくらそう思っても口には出さないけど。ほら、こっちはあくまでも取材させてもらう立場だから。スタジオでタレントさんにイジってもらうためとはいえさ」

笑うディレクター。

取材者「本当に超能力が使えるって、その人たちは信じてるんですか？」
ディレクター「いやあ、まさか。信じてないですよ。単にテレビに映りたいか、名前を売ってユーチューバーでも始めるつもりか

：本人だってネタのつもりでやってるわけだから、こっちがどうイジろうがお互い様ですよ。でも……」

取材者「でも？」

スパゲティを食べ終えて、皿の上に
フォークを遊ばせるディレクター。

ディレクター「ごくたまに、本気で自分を超能力者だと信じてるように見える人もいるな。そういう時はさすがにこっちも心が痛む。あなた、どっちがマシだと思います？自分は超能力があるって信じてるのに世間に相手にしてもらえないのと、たとえば僕みたいな軽薄なバラエティ屋でも、相手にしてもらえると」

取材者「どうでしょう。私は自分が超能力者だなんて思ったことがないので」

店員がホットコーヒーを持ってくる。

店員「お待たせ致しました。こちら、お下げしても……」

ディレクター「ああ、どうぞ」

店員「失礼します…」

店員、スパゲティの空皿を持って行く。
コーヒーを一口飲むディレクター。

ディレクター「僕は思ったことがありますよ。
ほんの子供の時だけ。分かったんですよ
ね、ガチャポンを開ける前に中に何が入っ
ているか。もちろんそんなものは偶然の一
致に過ぎないけど、だから、心の片隅で
は信じたいって思いもあるんですよ」

取材者「超能力を？」

ディレクターはコーヒーに添えられた
小さなスプーンに視線を落とす。

ディレクター「超能力者を、かな」

○アパートの一室（夜）

今まで話していたディレクターと他二
人の撮影クルーが玄関から出て行くと
ころ。

田中「すみませんね、いつもはちゃんと曲が
るんですけど」

ディレクター「いえいえ、とんでもない。今日はどうもお邪魔しました。また、連絡しますんで」

田中「はあ、どうも、よろしくお願いします。

今度は曲げますんで。本当に、いつもはちゃんと曲がるんだけど」

ディレクター「ははは、待ってますよー」

田中、頭を下げる。ディレクターたち、去る。

田中「……」

去ったことを確認して、田中が顔を上げると、先程までのしまりのない顔つきとは打って変わって、冷たい顔つきになっている。

彼が手に持っていたスプーンを顔の前にかざして見つめると、刹那、一条の閃光のようなものが走って、スプーンは日本刀で居合い切りをしたように横に切断される。

床に落ちていくスプーンの先端。と、

畳から数センチのところ、スプーン
の先端は宙に浮いて制止する。それを
無表情に見つめる田中。

田中「たしかに、スプーン曲げなんてやった
ことはないねえ。簡単すぎてつまらない」
田中はゴミ箱を見る。するとスプーン
の先端はその方向に飛んで行ってゴミ
箱に落ちる。

それから田中は振り返って、部家を見
渡すと、部屋中に散らかったモノが
一斉に空中に浮く。

田中「装飾だって大変なんだ。手間賃ぐらい
は欲しいよなあ」

田中が部屋の中央を見ていると、宙に
浮いたモノたちはそこに凝縮されて
バランスボールほどの大きさのスクラ
ップ球になる。

田中「さて、どうしようか」

突然、何かに気付いて目を見開く田中。
スクラップ球はすごい勢いでカーテン

を締めきった窓を突き破る。
ガシャーンという大きな音。
外からの風でカーテンがゆらめき、
その向こうに猫耳フードを被った男・
ミルク（３３）の怯えた顔が一瞬見え
る。

ミルク「うわっ」

田中「誰だお前……」

田中は窓に駆け寄って念力でカーテン
を開ける。

そこにミルクの姿はなく、周囲を見渡
すと、夜空をスタタタと走って逃げ
ているミルクの後ろ姿が目に入る。

目を丸くする田中。

田中「なっ……！！」

声「こっちだよ、こっち」

振り返る田中。そこには誰もいない。
田中は今度は玄関に駆け寄ってドアを
開ける。するとその向こうには、どこ
までも続く下り内階段がある。

○階段の空間

思わず後じさった田中は、足を踏み外して階段を転げ落ちる。田中が背を向けている内に部屋も同じ下り階段になっ
っていたのだ。

落ちる途中で空中に浮き、そのまま空中で静止する田中。その表情は恐怖に染まっ
ている。

田中は震えながら姿勢を立て直すと、階段を上っていくが、階段は上にもどこまでも続いていて、部屋は見えない。誰かが空間の外で話しているが、その声は田中には聞こえない。

声 1 「そ、そこまでやらなくても…」

声 2 「ミルクが下手に近づくからじゃんさ

ー

声 1 「ごめんなさい…」

声 2 「いいよそういうの。ったく」

○アパートの外（夜）

階段の前に主人公のコウ（男・17）
が立って不安げに建物を見上げている。
服装はロングTシャツにウインドブレ
ーカー、下はジャージ。あまり似合っ
ていない。

声2「で、どうなのコウっち。できそう？」
コウ「わかりません…でも…」

○テロップ…三日前

（以下回想）

○渋谷・センター街（昼・雨）

コウ、何かに怯えるようにふらふらと
傘も差さずに雨の中をさまよって、
時折通行人に声をかける。

コウ「すいません、あの…」

通行人1、無視して去って行く。

コウ「あの、すいません…」

通行人2、無視して去って行く。

それに気付いて一人のスーツ姿の女性

が振り返る。彼女の名は6番、年齢は30代に見える。

コウ、どうしていいかわからずコンビの軒先に座り込むと、やってきた6番が自分の傘にコウを入れる。

6番「どうしたの？」

6番の顔を見上げるコウ。

○渋谷警察署・少年係（昼・雨）

6番とコウの対応をしている中年の男性警官がうむと考え込む。

男性警官「どこから来たのかもわからない。自分が誰かもわからない。犬のおまわりさなんだなあ。困ってしまったって……」

男性警官、続きをコウに振る。

コウ「わん：わん：わわん？」

男性警官「おう、そうそう。それはわかるか」

6番「真面目にやってくれませんか？」

男性警官「いや、ふざけてるわけじゃないで

すよ。でも行方不明者照会をしようにも、情報が足りなくてなあ。持ってるものはその宇宙船と写真だけですか？ 学生証とか、保険証とか、財布だけでもあれば何か参考になると思うけど」

机に置かれたスペースシャトルのオモチャと、夕暮れ時の南国の海岸の写真に視線を落とすコウ。

6番は帰り支度を始める。

6番「とにかく、何かわかったら一応連絡を下さい。一課の秋吉刑事に6番が来たと言えは伝わりますから」

男性警官「6番？ あの、もう一度お名前を：」

6番「6番が名前です」

怪訝な表情の男性警官。

○喫茶店（昼・雨）

ディレクターがインタビューを受けていたのと同じ喫茶店、同じ席。

注文を待っている店員を尻目にコウは
メニューを見て考え込んでいる。

6番「なんでもいいから頼んじやって。紅茶。
コーヒー。なんでもいいでしょ。コーヒー
はわかるよね？」

コウ「（顔上げて）あ、はい、コーヒー……」

6番「（店員に）じゃホットコーヒー2つ
下さい」

店員「かしこまりました」

店員去って、コウはぼーっと雨の降り
しきる窓の外の往来を眺める。

6番「君をどこに連れて行けばいいのかな。
役所？ 病院？ 本当に何も覚えていなけ
ればだけど」

コウ「本当にわからないんです」

6番「言葉もわかるし小便の仕方もわかるし
犬のおまわりさんも歌えるのに？ 何か
目的があつてそんな真似してるんなら、
早めに言った方がいいよ。厄介なことにな
るから、君が」

コウ「目的なんて……」

6番「やばいクスリでもやったの？」

何か閃いたように6番の目を見つめる
コウ。

6番「勘弁してよ、ジャンキーの相手なんて……」

コウ「あの、ぼく、宇宙飛行士らしいです」
6番「……」

コウ「さっきは聞かれなかったから言わなかったですけど、これ探すヒントになりますよね？」

店員がコーヒーを持ってくる。

店員「お待たせしましたホットコーヒーで
ございます」

店員去る。

6番、頭を搔いて、

6番「まだクスリ残ってるな……」
コウ「いや！ 本当なんです！」

コウ、慌ただしくポケットからスペー
スシャトルのオモチャをテーブルに出

し、その手がコーヒーカップに当たる。
カップが床に落ちてガシャンと音を立
てる。

コウ「あゝ」

6番「何やってんの、もう」

割れたカップと床に出来たコーヒーの
池を眺める6番。

コウ「す、すいません」

コウ、床に屈んでカップを片付けよう
とする。

6番は店内を見回す。

6番「そのままでもいいよ。店員さん呼ぶか
ら。ねえ。そのままで——」

コウ「あつぶね。良かった」

6番、コウを見ると、割れたはずのカ
ップが割れておらず、コーヒーもカッ
プに入ったまま。

6番は驚くが、表情には出さない。

座り直してコーヒーを飲むコウ。

コウ「説明しますね、僕は宇宙飛行士で——」

―

6 番「ねえ君、寝るところはあるの？」

○ 渋谷・雑居ビル・外観（夜）

小さなＴシャツ屋や占い屋が入っている5階立て程度のビル。

○ 同・エレベーター前（夜）

案内パネルに「5F ころメンタルクリニック」と書いてある。
エレベーターの階層ランプが5階で止まり、チーンと到着音。

○ ころメンタルクリニック・待合室（夜）

待合室のソファをくつつけて、そこに横になって漫画を読んでいたミルクが、入り口に立っている6番とコウを見る。

ミルク「あ、先生。それ、新しい人？」

6 番「勝手に入るなって何度言ったら

わかるの？」

ミルク「まあ、でも、ほら、誰も来ないじゃないですか」

トイレの流れる音がして、トイレからジャージ姿の紅芋（17）が出てくる。

紅芋「あ、っちわっす」

6番「お前もかい。部室じゃないっつーの」

6番は傘を傘立てに入れて、上着を脱いでミルクに投げて渡すと、

6番「乾かしといて。仕事」

ミルク「はいはい」

6番はウォーターサーバーに水を取りに行く。

所在なくうつむいて立っているコウ。

紅芋、コウに近づいて、

紅芋「よっ。元気？ わたし紅芋。あんだ

名前はなんてーの？」

コウ「あ：えーと：」

ミルク「紅芋っていうのはトイレばかり行ってるからで、しよっちゆうオナラー」

紅芋、ミルクが言い終わらないうちに
ミルクのみぞおちにパンチを食らわし
て黙らせる。

ミルク「す：すいません：」

6番「そういうえば名前、まだないんだっけ。

コウ「っていうのは？ さっきコーヒーか

紅茶かで迷ってたでしょ。だからコウ」

コウ「コウ：」

6番、コウに紙コップの水を渡す。

6番「持ってて」

○殺風景な白い部屋（ビデオ映像）

中央に衝立の置かれたテーブルで、
目隠しをした少女を被験者に白衣の
男たちがESPカードを用いた透視
実験を行っている。

○同・診察室（夜）

そのビデオをモニターで見ている6番
とコウ。

6 番「新しく連れてくる人にはいつも見せて
るけど：君には必要ないか」

コウ「はあ」

6 番、ビデオを消してコウに向き直る。

6 番「現在までに数多の科学的な超能力実験
が行われてきたにも関わらず超能力の存在
が客観的に証明されたことはない。しかし
偶然では片付けられない：つまり、超能力
の存在可能性を示す実験結果はいくつもの
報告されている。このことが意味するのは
何か」

コウ「：」

6 番「超能力肯定派ならこう捉える。観測者
の超能力に否定的な思い込みが実験にバイ
アスをかけている、あるいは被験者のエネ
ルギ―を奪っている。これは少数派だけど
ね。超能力否定派ならもっとシンプルにこ
う考える。インチキだ、とね。私たちは
そのどちらの立場も取らない。超能力は、
ある状況では確かに実在する。けれどもあ

る状況では実在しない」

6番、コウに近づいてその心臓を指さす。

6番「超能力（それ）は、君が認識する君のイメージと、他者が認識する君のイメージが著しく乖離した時に生じることがある。もし君が自分は空を飛べると本気で思い込んでいて、他者がそんなものは妄想だと君を笑うなら、その時に君は飛べるかもしれない。そして、君を笑った誰かが君が本当に空を飛べると認識を改めた時に、君は空を飛ぶ能力を失ってしまう。私たちはそうやって能力を失うことをアイデンティファイ（可能性の収縮）と呼んでいる」

しばし見つめ合う6番とコウ。

6番は真剣な顔。コウは困惑した顔。

コウ「あの：それで：どういうことですか？」

6番「百聞は一見にしかず。ちょっと、外に出てくれない？」

コウ「はあ」

コウ、言われるがままに扉を開けると、そこには田中が閉じ込められたのと同じ階段空間が広がっている。

コウ「え：？」

コウは慌てて振り返るが、そこも同じ階段空間になっている。

コウ「あの：すいません：あの！」

コウ、戸惑いながら階段を上っていく。

紅芋の声「やつほー。調子どう？」

コウ「紅芋さん？ あの、すいません、あれ、

紅芋さん、どこにいるんですか？」

紅芋の声「ふっふっふ、探してみなはれ」

コウ「そんな：助けて下さいよ！ ねえ誰

か！ 出して下さいよ！」

コウは再び階段を、今度は走って上り始めるが、階段の終わりは一向に見えない。

紅芋の声「無限階段。それが私のハイパーステーション（超能力）。出られないよー。

一生そこから出られませーん」

コウ、怯え、息を切らして走り続け、
派手に転ぶ。その瞬間、目をつむる。

○同・待合室（夜）

転んだコウが目を開けると、そこは
待合室。

紅芋「ダイジヨブ？」

その顔を覗き込む紅芋に、

コウ「うわあああああ！」

コウは怯えて壁まで後ずさる。

ミルク、呆れ気味に紅芋を諭す。

ミルク「あの、手心というものをですわね……」

豪快に笑う紅芋。

紅芋「まま、そう怯えなさんな。あんた今、
私の能力を知ってるじゃん？ 知ってる人
には使えないんだ。だからもう安心。ウチ
らチエンバーってわけ」

コウ「チエンバー……？」

困り顔のコウに、診察室から出てきた

6番が近づいてきて、手近な椅子に腰を下ろす。

6番「君をここに連れてきたのは慈善事業じゃないよ。君がどんなハイパーステイションを持っているのか正確に探ってみたいと思ったから」

6番はコウが床に落としてこぼれた紙コップの水を指さす。

6番「元に戻してみて。きっとできるはず」

(回想終わり)

○アパート・田中の部屋(夜)

玄関は開け放たれ、窓は割れ、そこから風が吹き込んでいる。

アパートの向かいの家の庭には田中の飛ばしたスクラップ球がバラバラになって散乱していて、住民がそれを調べたりどこかに電話したりしているのが、割れた窓からは見える。

玄関から不安げな表情のコウが入ってくる。

○階段の空間

田中、へとへとになって階段を上っていると、ようやく元いた自分の部屋の入り口が見える。

○アパート・田中の部屋（夜）

部屋の中央に立ち、目をつむって集中するコウ。

コウ「直す…できる…僕ならできる…」
手をぎゅっと握りしめる。

○階段の空間

田中、階段の最後の一段を上がって、倒れ込むように部屋に入る。

○アパートの一室（夜）

入ってきた田中、目を見開いてその場に立ち尽くす。

壊れたはずの窓は元通りになり、念動

上に座っている。ミルクが宙を歩いて連れて来たのだ。

コウ「あ、あの…」

ミルク「ん？」

コウ「超能力を使う人と、それを観測する人の認識が一致すると、その場では能力は無効化される…で合ってますよね？」

ミルク「そうそう、いいね飲み込みが早くて」

コウ「じゃあ、どうしてミルクさんは自分の空中歩行の能力を使って僕をここまで連れて来られたんですか…？」

ミルク「そのためのアイマスクじゃない」

コウ「でも、今、僕はミルクさんがここで空中歩行していることをミルクさんに話してもらったから知っていて、ミルクさんも自分が空中歩行していることを知っていて…」

ミルク「…」

コウ「…」

ミルク、能力が無効化されて転落して
いく。

ミルク「ぎゃあああああああ」

コウ「：ミルクさん？ ミルクさん大丈夫で
すか？ ミルクさん」

煙突の上に一人取り残されるコウ。

コウ「誰かいますかー。助けてくれませんか
ー。誰かー」

(了)